

## 平成二三年度入学式 式辞

新入生のみなさん、そして、ご列席の方々、こんにちは。

新入生のみなさんは、晴れて本校の生徒になりました。後ほど、みなさんの代表として、岸川君と馬場君の誓いの言葉が予定されています。この場には、薬師寺道明久留米大学長、前川博学校法人久留米大学理事長、長谷川房生久留米大学附設高等学校同窓会長、緒方徹志久留米大学附設中学高等学校後援会長の方々を中心とする来賓にご列席いただいておりますし、もちろん、保護者の方々もいらっしゃいます。誓いの言葉は、学校に対するだけではなく、ここにいるすべての人たちに対しての誓いでもありますし、恐らくは、この場以外の社会の全体に対する言葉でもあるとして受留めたいと思います。

まだ、誓いの中身は知らないのですが、みなさんが有意義で楽しい附設生活をおくろうという決意を表しているに違いありません。もちろん、みなさんの有意義で楽しい附設生活を先生たちやわたくしも期待しています。そのための手伝いは、わたくしたちの厭うところではありません。たがいに頑張って行きたいと思います。

ところで、みなさんの有意義で楽しい附設生活とは、一体、どういうことでしょうか。大事な前提条件があります。それは、みなさん一人ひとりが附設生であることの意味をしっかりと理解し、そして、ふさわしい心構えを備えることです。このことは決して当たり前のことではありませんから、説明が必要になります。

まず、みなさんは今どんな立場にいるか確かめるところから始めましょう。つい先日のことですが、三月一日に東北地方太平洋沖大地震が発生し、引き続いた大津波とともに、岩手、宮城、福島、茨城の四県を中心に、大惨禍を引き起こしました。死者、行方不明者は合わせて三万にも達しようという状況ですし、津波が襲った地域一帯の様子の報道に接しても、何と表現すべきか言葉が見つかりません。さらに、福島第一原子力発電所の制御機能喪失による原子炉建屋の崩壊や放射能漏れが生じました。この東日本大震災の全貌は、まだまだ、明らかにはなっては来ないと思えますし、ここにいるみなさんは、遠い土地のことで、大変だ、お気の毒だ、何ができるだろう、と思うだけで、自分たちのこととしての実感は薄いかも知れません。しかし、すでに、附設も無縁ではなくなっていて、残念ながら、みなさんにも深刻な影響が及んできます。今の段階で詳しくは述べられませんが、恐らく日本中至るところで似たようなことが起きつつあると思います。日本は、いつの間にか想像していたよりもはるかに脆弱な国になってしまつていたとつくづく感じます。

要するに、ついこの間までの日本と東日本大震災後の日本とはまるで違つてしまつたと

いうことです。みなさんの置かれている状況とは、今、目の前に現われつつある大震災以後の日本としっかりと向き合っていかなければならないということです。しばらくはこの間までの日本のことは忘れなければなりません。しばらくと言いましたが、五年か十年か、あるいはもっと長いかもしれません。この大震災の結果として、みなさんが一線で活躍することになる十数年後の社会、日本、世界は今とは全く違っているでしょう。このことをよくよく考え抜いてほしいと思います。

今度は、みなさんが本校を志望した理由を思い起こしてみてください。もちろん、しっかりと勉強して、しかるべき進路を目指したいということがあったと思います。もともと、中学への新入生のみなさんは、まだ、自分の適性や興味もはっきりしてはいないと思いますので、当然、具体的な進路の問題はいろいろと勉強してからのことになるでしょう。一方、高校への入学生のみなさんは、ある程度、具体的な人生を考えている人もいると思いますし、進路への思いが勉学の動機になってくる時期だと思えます。

しかし、人生は知力や学力だけで過ごしていけないものではなく、人間としての高い志を支える総合力が鍵になります。そういう総合力の基盤をなすもの、それが、建学の精神です。本校を志望したみなさんは、言うまでもなく、本校の建学の精神がある程度わかっていると思います。また、保護者の方々には、それに同感できるところがあったので、大事なお子様を本校にお預けいただくことになったものと、わたくしどもは理解しております。そして、附設がこの建学の精神を掲げ、すでに六〇年余りの歴史があるということを、今、確認しておくことは、これからの日本や世界の様子がつい一箇月近い以前とは全く変わってしまうであろうことを前提にすると、大変重要なことになると思います。

本校のホームページでは、建学の精神として

「国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成」

と書いてあります。実は、この表現は、中学を創設されたときの校長である原巳冬先生が、初代校長の板垣政参先生が創立時の世情を背景に示された言葉

「国家・社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物の育成」

を、附設高校二十五年史の序言の中で、言換えられているものです。「為他」という語が明示的に加わってはいませんが、内容的には、板垣先生が意図されていたものと変わらないと思います。わたくしは校長になってから附設の歴史を多少勉強し、原先生の言葉の方が、今の時点では、わかりやすいと考えましたので、一昨年から、建学の精神としては、こちらを表に出すことにしました。キーワードは「為他の気概」であると申せましょう。

人間は一人ひとり独自の個性を持ち、そういう意味では皆違いますが、一方、一人では生きていけません。人のために働き、社会を形作り、おたがいに、尽くしあい、感謝しあ

って生きていきます。「為他」ということですが、しかし、それは他人に迎合することでもなく、調子を合わせることでありません。何をなすべきか、何がただしいか、そのことをきちんと心得てこそのものであり、「誠実にして気概ある」ということです。「国家社会」については、板垣先生の六〇年余り前、原先生の四〇年余り前と違って、少し注釈が必要になっていくかも知れません。しかし、それを「世界」と言換えてしまうと、勘違いのものになります。わたくしたちは、いきなり、「世界」につながっているわけではなく、まず、「日本文明」という独自のものを背負って生きています。「世界」への貢献は、日本の文化文明を身に付けているからこそ可能になっているのです。みなさんが将来の職業として考えているものの中には、日本の社会の中でしか通用しないものもあるでしょう。しかし、日本の社会を健全に維持するという地味な仕事をする人たちがいればこそ、全体として、世界に貢献できることにもなります。日本を考えることが同時に世界を考えることでもある、そういう時代にわたくしたちは生きていくことを自覚しましょう。

以上が、本校の建学の精神についての説明です。附設の生徒であるということは、このようなことが、いわば、心身にしみこみ、さまざまな行動の規範になっているということになります。

そこで、本校の新生入生としてのみなさんには、本校での生活を通じて、建学の精神を体現した立派な青年に自らを鍛え上げ、ゆくゆくは現在の困難な状況を自ら乗り越えられる、そういう力を養ってほしいと思います。このことは、どのような職業を選ぼうとも変わりません。繰り返しになりますが、東日本大震災は今後の世界の形を変えてしまうくらいの深刻な影響を今後に及ぼすだろうと、わたくし自身は心配しています。一箇月前まであった、元気がなくなっていたとは言え、繁栄していた日本はもうありません。多分、大震災の本当の影響はみなさんが社会の第一線で活躍することになるはずの一〇年後二〇年後にはつきりと見えてくるだろうと思います。それが関東大震災の一〇年後や二〇年後とは違う形であることを切に願うものですが、そうであるかどうかは、偏に、まあ、そう言うっては言い過ぎでしょうが、ともかく、みなさんのこれからの働きに掛かっています。

みなさんは、ここにいらっしゃる大人たちからみれば、まさに、虎の児、いや、獅子の児と言った方がいいかもしれません。大事な、大事な存在です。附設は、千尋の谷ではありませんが、それでも、大事な、大事なみなさんを、しっかりと、鍛えます。みなさんもしっかり鍛えられて、大成し、成獣として、獅子吼する日を迎えてください。期待しています。

平成二三年四月四日

久留米大学附設中学校・附設高等学校

校長 吉川 敦